

新聞記事に見る戦後の阿波踊り —戦後の阿波踊りを支えたもの—

中村 久子

AWA DANCE IN THE POST-WAR PERIOD VIEWED THROUGH THE NEWSPAPER ARTICLES —WHAT SUPPORTED AWA DANCE IN THE POST-WAR PERIOD—

Hisako NAKAMURA

Faculty of Integrated Arts and Sciences, University of Tokushima

ABSTRACT

There exist many folk dances which have been inherited from one generation to another in Tokushima. More than 50 folk dances were recorded in the study undertaken in 1966. But many of them were not well-known even within the prefecture, let alone outside of the prefecture. Only the Awa Dance enjoys its fame as a dance representing the prefecture. In comparison with the other folk dances in Tokushima, the Awa Dance became popular in the post-war-period. The main purpose of the present study is to investigate the factors that led the Awa Dance to represent the prefecture.

The articles related to the Awa Dance that appeared in the *Tokushima Newspaper* from 1946 through 1955 were sorted into a chronological table covering administrative, economic and popular efforts to promote it. They were then examined together with the references concerning the Awa Dance.

The results are summarized as the following:

- 1) Because of the paucity of sightseeing resources in the prefecture, the Awa Dance was chosen to appeal to people outside the prefecture. (The Awa dance was not really supported as a cultural event.)
- 2) In order to recruit many participants in dancing, the administrative and the economic bodies prepared championship flags, certificates of commendation, prize money, etc and held contests so that people good at dancing and fond of it could compete one another.
- 3) As a result, the dancing itself became refined and fit for appreciation, ultimately increasing the number of visitors.
- 4) Positive economic support was given from the administrative and the economic bodies, making it possible not to depend upon donations from town associations and Buddhism parishes.
- 5) The development of the Awa dance, which now shows a great deal of variations, is not only due

to the efforts of people dancing and supporting it but also due to the unique characteristics of the dancing itself, which are not found in other folk dances in Japan.

Key words: Awa Dance, folk dance

1. はじめに

徳島県には、代々踊り継がれてきたその土地の民踊が各地に存在する。昭和41年度の調査では、大麻の神踊り、北島の盆踊り、藍住の藍こなし、土成の二上り音頭等五十を超える民踊が記録されている¹⁾。また、日本民俗芸能事典²⁾には、一字の雨乞い踊り、宅宮の神社踊り、木頭の太刀踊り、穴喰の団七踊りの他に十二の踊りが徳島県の民踊として記載されている。

しかし、その多くは県外はもちろん、県内にも知られることなく、阿波踊りのみが徳島県を代表する踊りとして知れ渡っている。徳島県に存在する数多くの民踊と比較して、阿波踊り（城下町徳島の盆踊り）は戦後に抜き出て人々に知られ、愛されるようになった。

戦後の阿波踊りは見られることを意識して、動きを変化させたり、隊列を変化させたり、独自のリズムパターンをも生みだして踊られている³⁾。このように阿波踊りの動きが多様化したことと、徳島県に存在する他の多くの民踊と比較して阿波踊りだけが世に知られるようになったことは何か関わりがあるのではないかと考えられる。

そこで、このように徳島を代表するまでに育った阿波踊りを支えてきたものは何であったのかを明らかにすべく、本研究に取り組んだ。

2. 方 法

昭和21年から30年までの徳島新聞（7月～9月の記事中心）より、阿波踊りに関する記事を取り上げ、戦後10年間の阿波踊りについて、年代別の表⁴⁾を既に作成したので、それを基に、阿波踊りに関する文献によって補足し、阿波踊りの発展を支えたもの（行政、経済、人々）について考察する。

3. 結果と考察

阿波踊りを支えたものは次のようにまとめられる。

(1) 踊ることによって阿波踊りを支えた人々

終戦後、はじめての盆踊りを迎える前に「葦本町の『ノンキ連』あたりはどうと踊り出ようと…」(21. 8. 9)と新聞記事にとりあげられていることから、ノンキ連が戦前から活躍していた連であることがわかる。戦前に組織された連が戦後に復活したり、「街のアンチャン、粋な芸者の伊達姿、振袖を赤いタスキでしめた可愛い女の子の団体がつぎからつぎと現れる」(22. 8. 31)とあるように、男も女もそれぞれが色々な服装で仲間を誘って終戦後の盆踊りを盛り上げた。

昭和23年には、「くり出す踊りの団体は百数十組に上り…」(23. 8. 20)とあるように一晩に百を超える団体が組織されて阿波の盆踊りを楽しんだ。

昭和24年には団体名が具体的に示されている。初日の八日に優勝の鐘三つをならしたのは「たぬき連、藤本連、第一劇場、丸新、天水連など十数組」(24. 8. 9)で、九日に三つの鐘をならしたのは「徳島青果、専売公社、天水連、勝浦鉾山、娯茶平、ニューライトなど」(24. 8.

10)であった。十日の阿波踊りベストテン選抜競演大会には45組が選ばれて、出場している。審査の結果ベストテンとなり、はれの優勝旗を贈られたのは「富街連、娯楽平、天水連、かたばみ曾、三岐田(海部)、のんき連、丸新、阿波踊り子連中、ライト、勝浦炭鉱」(24.8.11)であった。また、蔵本競演場では優秀団体として「娯茶平、キラク連中(鴨島)、大正楼、二葉舞踊曾、阿波踊り子連中、二葉大人舞踊曾、君の家(鴨島)、たぬき連、あきれた連中、大西組(穴吹)に賞品を贈った」(24.8.11)とあり、元町大競演場で踊りを競った後に蔵本大競演場まで出かけて、再び踊りを競い合い、両競演場で賞を贈られた連もあった。

昭和25年は「後進の途をひらくために藤本、娯茶平、のんき、天水連中は無審査組となった」(25.8.8)と記されている。前年までに二つであった市内の競演場が七つに増え、賞品、賞金等も多く出された。「踊り子連中もことしは天水連、藤本連、のんき連、娯茶平連、富街連をはじめ商工課、専売公社、東邦レーヨン、東洋紡、日本資糧、共同汽船など…カップ、ミスト両化粧品本舗など宣伝効果をねらった踊りチームの多いのが目立っている」(25.8.26)とあるように、この年には、多くの企業が踊りに参加し始め、翌26年には「昨年は職場という職場はあげて踊り連中を編成、その数ざっと五百団体」(27.7.31)と、書かれているように各企業は自社の宣伝を兼ねて、踊りに参加していたことがわかる。

昭和26年は踊り期間の最終日8月19日に、内町競演場で下記の団体を選賞している。
[無審査] のんき連、藤本連、娯茶平、天水連、阿呆連

[優秀団体] えびすさん連、ひょつとこ連、浮世連、西徳島うきすけ連、気楽連、おどらん会、すずめ会、鳴門うずまき連、えびす連、おかめ連、新橋連、ミスト徳島会、阿波商、電話局、日新、東邦レーヨン、編物友の会、小すずめ連、だるま連、光せり市連、佐古ニコニコ連、松村酸棗、森永、徳島青果、小男鹿、三和銀行、専売公社、坂東食品、第一劇場、四国銀行、三岐田観光協会、秋田町うきすけ連(26.8.20)

蔵本競演場でも「三和銀行、二葉会、坂東食品連」(26.8.20)が表彰されている。

昭和26年には、阿波踊り子名鑑として徳島市42連をはじめ各郡市の踊り子連が紹介され、表1のように総数142連に上っている(26.8.13)。この中には、学校関係の連等はあまり含まれていないのと、にわかになできた連や県外から参加した連を加えると、その当時に相当数の連が存在したと考えられる。

このように、幾多の連が結成され、優秀団体として表彰されたが、彼らには同時に賞品や賞金が用意されていた。新聞記事によると、昭和21年の進駐軍慰問の盆踊り大会では参加者には参加賞が贈呈された(21.8.11)。昭和22年の両国本通り商店街連盟では盆踊り審査会が開かれて、優秀団体に優勝旗が授与されたり(22.8.26)、徳島放送局が東新町栄屋の西側広場で踊りの審査を行って、一等一千元、二等五百円、三等二百円の団体賞を出している(22.8.27)。

昭和24年には蔵本町を中心に佐古西部、庄町、鮎喰、島田町、名東町などの商店街が協力して、競演に参加した団体に数百本の優勝旗と副賞うちわを準備し(24.7.27)、県商工会議所は豪華な踊りの競演に大小数百本の優勝旗を準備している(24.8.7)。その上、特別賞として知事賞、徳島市長賞(賞金)、商工会議所会頭賞、主催者賞(大優勝旗)がおくられ、とくに優秀な団体には民事部長官賞(賞状十枚)がおくられた(24.8.7)(24.8.10)。

昭和25年には、元町競演場で主催者が優勝旗千本、出演記念うちわ三百本を用意し(25.8.25)、蔵本駅前競演場では二十八日午後六時から阿波踊りコンクール予選大会を開き、優秀踊り

表1 昭和27年徳島新聞阿波踊り子連名鑑(1952, 8, 13)に記載されている連名

徳島市	西徳島浮助連, えびすさん, 古化作連, いさみ會, 天狗連, かたばみ會, 住吉連, 応化連, 岡田組連, 小男鹿連, うかれ連, 二葉會, ひよっこ連, 新橋連, 浮助連, 電通男子連, 電通女子連, 日本蓄積連, 藤本連, 今藤會, よしこの連, 阿呆連, 平和連, 吉野連, グルマ連, 天水連, 芳五連, 小雀連, うきよ連, えびす連, 豆えびす連, ともえ連, 東邦連, 東洋紡, 四國電力, 阿波商連, 三和連, バイブ連, 娯茶平連, のんき連, 女のんき連, 乱調連
那賀郡	玉置連, 中島連, 驚敷ライン連, 浮々連, 遼水連, のみ助連, みたけ連, 浮子連, 西中チビ連, ポスト連, ニコニコ子供會, 浮亀連
海部郡	浦島連, 阿波商連, 宵空連, おかめ連, ほがらか連, 奴連
三好郡	ハート連, つばめ會, 池田保線句連, えびす連, ぎおん連, 八幡連, 辻寮, 本町組, 中の町組, 浜西組, 流堂組, キキョウ組
美馬郡	吉田組, 逢坂若連, 奴組, 美馬畜産大西組, 小野響連
板野郡	やよい會連, 南十字星, 二葉會, 三ツ輪會, 板西子供連, 狸組連, 東洋連, 甘茶連, 和田連, 天狗連, 前川ヤツコ連, みづき連, 東組, 山皇子連, 羅漢組
阿波郡	戎組, 小雀連, 君が代連, 龍虎組, 子安組連, 八幡組連, 三咲組連, 井澤村連, おきょうぎ連, ふくや連, のんき連, つばめ連
麻植郡	きらく連, 若菊連, 七福連, 君の家連, 親和連
名西郡	ものずき連, だるま會, 壽連
鳴門市	商進會連, 斎田商店街連, うずまき連, 鯛島連, 斎田花びし會, 南浜えびす連
小松島市	飛鳥連, 金鳥連

子に特別賞金一封を贈呈した(25. 8. 28)。元町商店街からは大優勝旗を出して、四団体がこれまで阿波踊りの観光宣伝につくした功を表彰された(25. 8. 29)。

昭和26年には庄町学校前, 蔵本元町三丁目, 佐古十三丁目, 阿波商支店前の特設審査場の前を通った団体には抽せんで一等壹万円以下三等までの賞金をおくるという新企画もこころみられて(26. 8. 11), 数多くの踊る人々が集められたと考えられる。

戦後, 物資の少ない中で参加賞等, 賞品や賞金が出されたことは踊る人々を奮い立たせたであろう。また, コンクール形式で踊りを評価されるということ, その結果, 優秀な踊り団体として認められることは大いなる名誉であったと考えられる。数多くの賞の存在は有形無

形の贈り物を踊る人々に与えたのである。

三好³⁾は「阿波踊りは近世以来の伝統で各町の顔役たちが審査する、評判所というのがあって川柳で批評したようです。そのために踊りを良くみせるための工夫や努力をしたんですね」と阿波踊りでは、踊る人を評価する伝統がかなり古くから行われていて、踊る人を見る人を意識して踊っていたことを明らかにしている。

戦後に阿波踊りが開催されるようになってから、僅か五、六年でこのように多くの連が生まれ定着していったのであるが、阿波踊りを「踊ることで支えた人々」が年々増加した理由としては、

- 1) 幾多の賞を出すことによる宣伝効果→踊り子、踊り団体を集めた。
- 2) 審査によって優秀団体等を選出→踊りのレベルアップにつながった。
- 3) 企業が阿波踊りの宣伝効果に目をつけた→企業が踊り子を育成した。

等が考えられる。

(2) 踊る場を設けることで阿波踊りを支えた人々

昭和 21 年進駐軍の許可により盆踊りが復活し、国際親善協会主催の盆踊り大会では参加賞を出して人々を集めた。その後、阿波踊りを観光の目玉として売り出すためには、まず県下に阿波踊りを広めようと、22 年には盆踊り審査会を開催して優勝旗を授与したり、昭和 26 年までの間に知事賞を始め種々の賞を出し、多くの賞品、賞金、賞状、優勝旗等を与えた。こ

表 2 戦後の阿波踊りを支えた団体

年度	月 日	主 催・後 援	場 所
21 年	8/12	国際親善協会主催	市役所前広場
22 年	8/28, 29, 30	縣商工會議所・徳島市商店街連盟共催	
	8/30	徳島放送局	東新町元一楽屋西側空地
23 年	8/18, 19, 20	不明	両国橋通り
		不明	かごや町
24 年	8/8, 9, 10 (前期)	縣商工會議所・縣観光協会・元町商店連盟・西徳島商店連盟・若潮文化倶楽部・徳島新聞社主催 徳島県・徳島市・徳島市商店連盟・四国鉄道局・交通公社四国支社後援	徳島駅前・元町大競演場 蔵本駅前・蔵本大競演場
25 年	8/27, 28, 29	徳島市・縣商工會議所・縣観光協会	元町・蔵本・両国・吉野本町・徳島・東新町
26 年	8/16, 17, 18, 19	徳島繁栄連盟・徳島市共催 徳島新聞社後援	内町大競演場・蔵本大競演場・紺屋町・佐古駅前・津田・福島明神町・二軒屋他
27 年	8/16, 17 (前期)	阿波踊り振興連盟 (阿波踊り 350 年祭)	紺屋町
	9/3, 4, 5 (後期)	徳島市・市観光協会主催 徳島新聞社・四国放送共催	元町・新町・両国本通り・紺屋町・二軒屋

のことは、昭和初期に盆踊りが衰退したときに「審査所を設け、優秀なるものに対して賞品を贈与し、観光客誘致に成功した」⁹⁾過去の経験をもとに戦後の阿波踊り振興策として考えられた。

表2は戦後の阿波踊りの主催者、および後援者を表にしたものである。

競演および観覧の場を提供したり、賞品、賞金などを出して、阿波踊りを盛り上げたのは行政、及び経済団体が中心となっていた。これらの積極的な支援の目的は阿波踊りの集客力にあったと考えられる。昭和27年の記事「交通機関 鉄道、バス、汽船仲よく平日の二倍から三倍強、第二日目をヤマに手堅くかせいでいる。一略—商店街 もうけ頭はやはり軽飲食店、きびしい残暑も手伝ってどことも超満員、平日の三倍は軽いありさまで家族総出で転手古舞を演じた。Mデパートはざっと五倍というお客が詰めかけたがここは二倍少々の売行、二割は上まわる成績…」から阿波踊り期間に観光客が増加し、その集客力が商売繁盛につながったということは明らかである。

さらに、集客力のない観覧場は地元の商店街から見放され、その翌年には設営されなくなるという事実から、地元の舞踊文化を支えるというよりも経済効率優先という姿勢が垣間見える。阿波踊りを観覧する場は昭和25、6年には市内中心部だけでなく市内各地へ広範囲に設営されている。市内各地区の商店街は観覧の場を設けることによって、多くの人が集まる

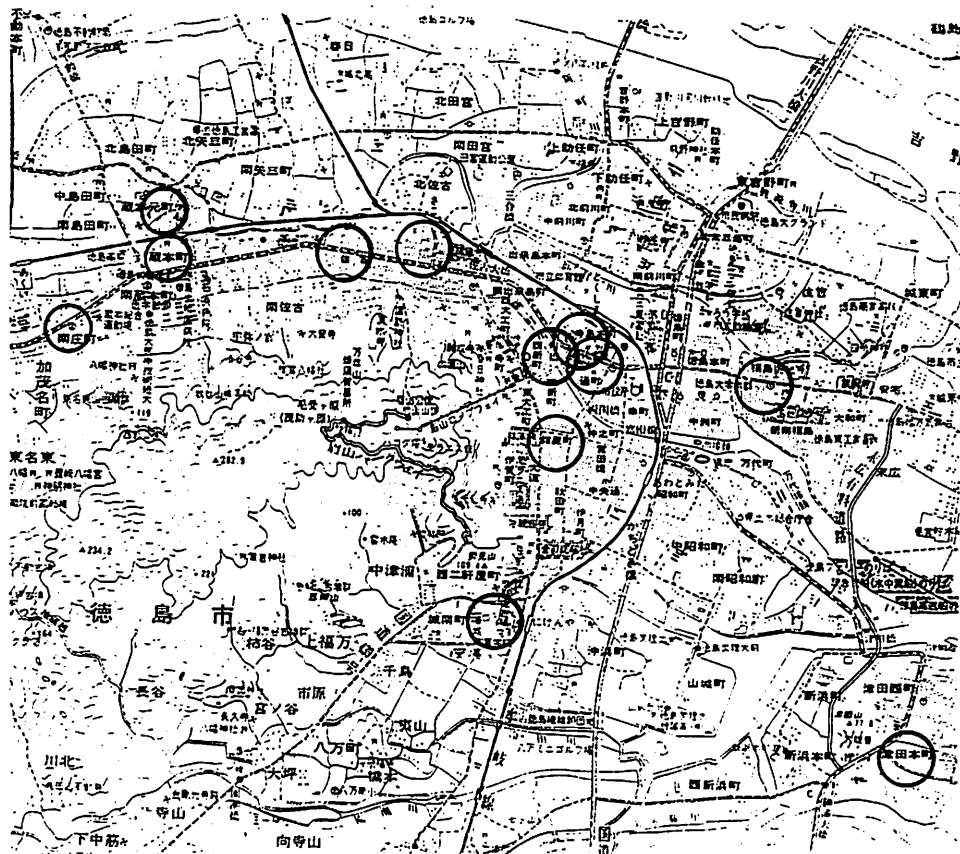


図1 昭和26年に設営された阿波踊り競演場の分布図

ことを期待して踊る場を提供したのである。ところが、市内周辺部では踊り子連が予想したほど集まらなかった。その理由として、踊る人々は一晩で回るのに都合のよい所を選んで回るので、どうしても市内中心部に設営された観覧場を中心に回って行くので、市内中心部から離れた所へは踊り子連の足が向かなかったのであろう。そこで、市内中心部から離れた地区では、観覧の場を設営しても、踊り子連があまり回ってこないことになり、多くの観客を集めることができないことになった。それでは、観覧の場を設営した意味がなくなる。その結果として、市内周辺部に点在していた観覧の場は、数年後にほとんど消えてしまった。

集客力のある市内の中心部にだけ観覧の場が残されたことは、図1(昭和26年に設営された阿波踊り競演場の分布図)、図2(昭和30年に設営された阿波踊り競演場の分布図)を比較参照すればわかる。

昭和27年の記事、「阿波踊り両あほう座談会(下)」で林⁷⁾が「明治時代に踊りの空気が非常に悪くなったというので、県庁から三回にわたって禁止されたことがある。ところがいまではその県庁まで踊り子連をくり出している。ずい分変れば変るものだと思う」と言うように、徳島県も徳島市も賞など出して戦後の阿波踊りを支えていた。

- ・踊る場を提供したのは主に行政、経済団体であった→舞踊文化を支えるというよりは、地域経済にプラスになるという考えが主であったと考えられる。

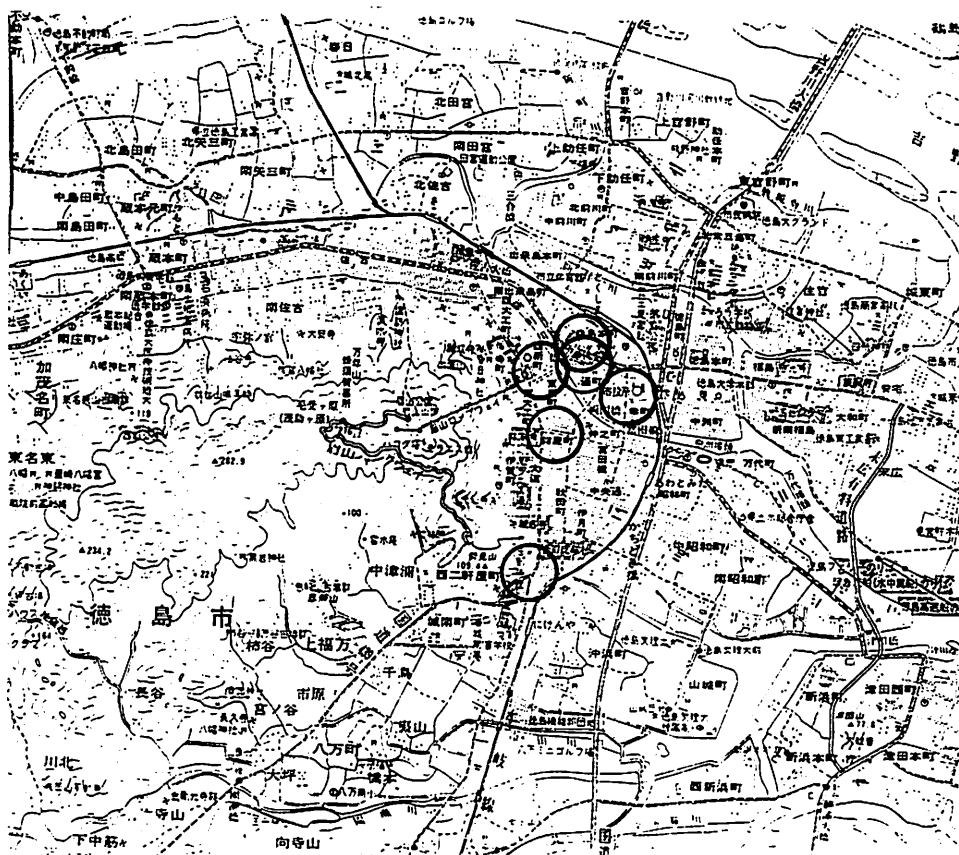


図2 昭和30年に設営された阿波踊り観覧場の分布図

- ・踊る場を提供しただけでなく、そこに‘踊る人々’を集めるために賞状及び賞品、賞金を出すことを考えたのも行政や経済団体であった。

(3) 経済的な支え

三隅⁹⁾は「有名な徳島の阿波踊なども、もと田畑を荒らす猪を追い払うために始めたという伝えがあり、あるいはこれも、害獣に化身した怨霊の鎮送を祈る念仏踊りであったかと思われる。阿波踊は、周知のように踊り子の集団が縦隊になって道を練って踊っていく形のものだが、こうした集団行進のタイプは、元来集団が家々をたずねて歩く時、または怨霊を鎮送する場合に行われるものだ」と阿波踊りが宗教的な行事であったと述べている。前田¹⁰⁾も「阿波踊りが他の踊りと変わっている点は、行進踊りであることだ。これは石山、笹山通りであって道のあるなしを問わず、いのししを追いはらう真似踊りであるから『ホーイホーイ』とどこまでも行進するのである。両手の動かし方も、いのししを追う手振そのまま、両足も石山、笹山を通る困難な歩法だ。その足取りは二の足をふむというのか、いわゆる“チュウチョ踊り”で、進もうとして進まれぬ状態があらわれている。阿波踊りのこの両手両足の身振りと、あの石山、笹山の『はやし』とは、この踊りの起源が何であるかをあきらかに物語ってくれている。築城落成の場面など少しもあらわれていない」(27, 8, 13)と述べ「盆祭は雑穀を食べる庶民階級の収穫感謝祭である」と全国のお盆行事を調査した農林省の技師の発表を引用している。

現在では築城説はありえないと考えられているが、阿波踊り起源説にはいろいろあり、念仏説、念仏風流説はその一つである。三隅、前田のいうように、もしも、阿波踊りが念仏踊りを源流とするものであったとしても、多くの念仏踊りに信仰的要素が衰えて娯楽的要素が強まったり、当時流行した風流熱に動かされて念仏踊りが娯楽化したという過去の例¹¹⁾から見れば、戦後の阿波踊りがすでに檀家や町内会の寄付に頼ることがなくなったとしても何の不思議もない。

阿波の盆踊りでは、踊る人々は衣装や持ち物を自前で負担し、伴奏集団を引き連れて踊る。伴奏集団のそれぞれが自分の楽器を持っていた。現在のように連と呼ばれるグループが巨大化してきたころからは、個人ではなく、連が楽器を所有する場合もあるが、とにかく、阿波踊りは大きな樽を組むでもなく、道具や飾りが必要なわけでもない。つまり、事前の準備を必要とはしない。観覧の場はなくとも、公園などに踊る人が集まり、三味線を弾く人や笛を吹く人がいれば成り立つ踊りであった。現在、多くの子供がピアノを習っているように、戦前には三味線を弾くことができる人は多かったので、レコードプレイヤーなどの特別な機器がなくとも簡単に伴奏者を見つけて踊れるものであった。こうして考えて見れば、阿波踊りは昔も今も参加者負担の踊りで、あまり経費のかからないものであったといえる。

既に述べたように、行政や経済団体は踊る場や賞を用意して阿波踊りを盛り上げたが、阿波踊りの集客力で多くの観光客を集め、経済的には多大な利益をあげることを予想していたからこそ阿波踊りを支えたのである。

- ・踊る場を設営する等の経費及び賞状、賞品や賞金を出すための経費は行政、経済団体他が負担した。
- ・阿波の盆踊りは、もともと参加者負担で経費のかからないものであった。

(4) 阿波踊りそのものによる支え

1) 阿波踊りの特徴について

① 踊りの振りについて

檜¹¹⁾は「阿波踊りの一つの大きな特徴は、振付がないということである。どこの盆踊りをみても、一つの、二つの…、チョチョンがチョンという踊り方である。阿波踊りには振付を覚えるということは全くない。手を上へあげて、リズムに合わせて踊れば阿波踊りになる。ただ、そのときに約束事が一つある。これが阿波踊りのもう一つの大きな特徴である。一步前へ出した足を、も一度そこで踏みかえて、足で二拍のリズムを数えつつ前進するのである」と阿波踊りの特徴を述べている。また、古寺¹²⁾も「急調の三味線で、踊の振も一定せず自由奔放に勝手に踊る」と阿波踊りを紹介している。

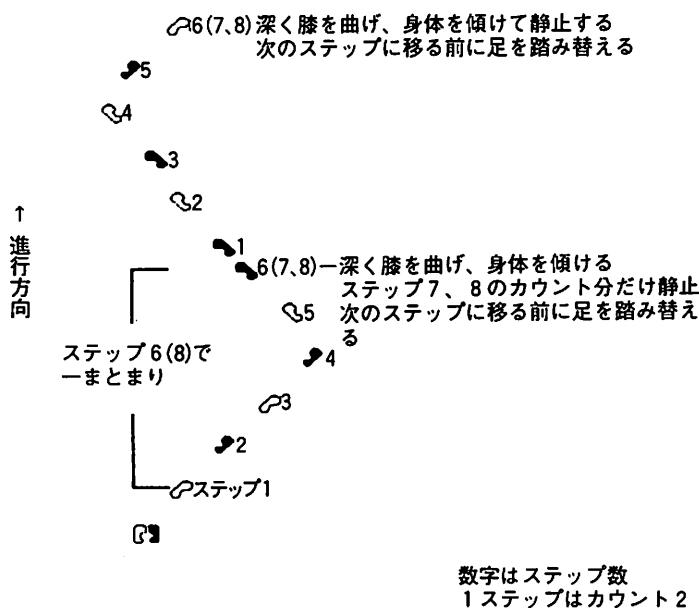
阿波踊りの踊り方について書かれている本^{13,14)}には共通して檜のいう約束ごとが基本の動作として記載されている。集約すれば、檜の言う約束事が、現在踊られている阿波踊りの振りであるといえよう。

檜に、阿波踊りには振付がないと言わせるほどに阿波踊りの振りは簡単で単純である。その約束事(振り)を基にそれぞれが自由に踊ることができるので、誰でもすぐに踊れるのである。また、多くの民踊と比較して、振りの一まとまりが短いことから、誰でもすぐに覚えらるるのである。

このように、振りが単純であることと、振りの一まとまりが短いことは、高低の変化をつけたり、ジグザクに進んで独自のリズムパターンを生み出すことが可能(図3, 図4)¹⁵⁾になり、阿波踊りの動きの多様化につながった。

② 踊りの形態

三隅¹⁶⁾は盆踊りについて「昔は道行→円陣踊り→道行という構成のものが多く、近代、円陣の踊りだけを伝えているものなかには、昔道行も行っていたのを簡略化したと伝えているところがある」と述べている。多くの盆踊りが道行を省略して、円陣の踊りを残して



数字はステップ数
1ステップはカウント2

図3 浮助遊 女性による女踊りから 変化1

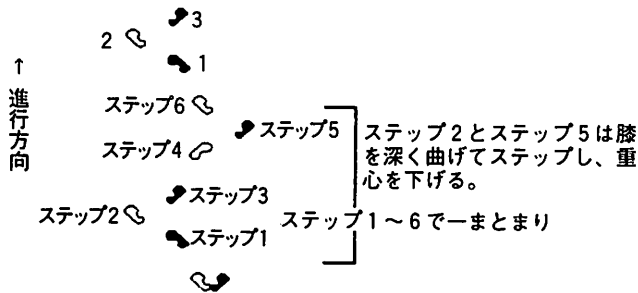


図4 ほんま連 男性による男踊りから 変化1

いるのに対して、阿波踊りは円陣の踊りを省略している。

阿波踊りが、戦前には広場等で輪になって踊られ、興がのると「新町橋まで行かんか、こいこい」と囃しながら列になって踊られていたことから考えると、戦後になってから急速に‘円陣踊り→道行’の形態から‘行進型’の踊りに移行したといえる。

阿波踊りの動きの多様な変化は、行進型で踊ることと密接な関係があることを考えると、過去に道行を省略しなかったことが現在の阿波踊りの発展につながったといえよう。

③ 伴奏音楽

多くの民踊は踊りの伴奏者を中心にして踊り、スピーカーから音楽が流れるようになって、そのなごりは大きな樽を組むことに見られる。阿波踊りの特徴は、踊るグループがそれぞれの伴奏者をつれていることにある。それぞれの伴奏者がつくことで踊りのテンポを自在に変えることができる。そのために、踊りの途中で音を止め、動きを停止することも可能である。緩急が自在であるということは、踊りを独自に変化発展させられることにつながる。これらのことも阿波踊りに動きの多様化をもたらす要因と考えられる。

2) 阿波踊りにおける動きの多様性について

徳島県に存在する数多くの民踊には見られない、阿波踊りだけに見られる特徴はその多様性にあると言っても良いであろう。動きを色々に変化させて踊ることができるのは、振りが‘単純’であることと、振りの一まとまりが‘短い’ことに尽きるであろう。さらに、伴奏集団がそれぞれの踊りグループについているということも、テンポや時間構成を独自に変化させる上で見逃せない。もちろん、踊りが行進型であるということも阿波踊りの動きを多様に変化させるのに役だっている。

このように、動きを変化発展させ得る特徴だけでなく、振りが単純であることや振りの一まとまりが短いことは、踊りを覚えるには‘簡単’ですぐに踊れる。それ故に、誰にも親しみ易い踊りとなり、徳島県内はもちろん、県外や遠くは外国の人々をも魅了したのである。

ところで、徳島県内には津田の盆おどり、由岐町のうちわ踊り等、阿波踊りに似た踊りはいくつかあったが徳島の盆踊りだけが阿波踊りと呼ばれるようになった。その理由としては、県庁所在地であり、かつては城下町であった徳島の盆踊りの方が支えてくれる力がより大きく、この踊りを売り出したいという願いがより強かったということが徳島の盆踊りを阿波踊りとして前面に押し出したということではないかと考える。

さらに、これらの期待を背負って、多くの踊り子連が技を競い合った結果として戦後の阿波踊りに空間構成や時間構成の変化発展が見られるようになったのである。

4. ま と め

- ・観光資源等県外に対してアピールするものが少ない徳島では盆踊りを売りだそうと考えた。阿波踊りに集客力があると判断された。
- ・行政、経済団体が多数の参加者を求めるために、優勝旗、賞状、賞品、賞金等を用意して阿波踊り競演会、阿波踊り審査会等を開催し、踊り好き、踊り上手を競わせた。
- ・その結果、踊りは洗練され、鑑賞にたえるものとなり、集客力が増した。市内周辺部では市内中心部と比較して、阿波踊りによる集客力の効果はあまりなかった。
- ・経済的には檀家、町内会等の寄付に頼ることがなく、行政、経済団体等の積極的な支援を受けた。
- ・現在、阿波踊りは多様な構成をもって踊られているが、このような阿波踊りの発展は踊る人々や支える人々のみならず、阿波踊りそのものにも、他の民踊に見られない特徴が備わっているためであるといえることができる。

文 献

- 1) 井上照江, その他 (1961): 阿波の民謡踊り, 徳島大学学芸学部卒業論文, 徳島, 1
- 2) 山路興造 (1976): 四国徳島の芸能, 日本民俗芸能事典, (日本ナショナルトラスト編), 文化庁監修, 第一法規出版 K・K, 東京, 748-763
- 3) 中村久子 (1991): 阿波踊りにおける多様性について－その1－, 徳島大学総合科学部健康科学紀要, 3, 6-17
- 4) 中村久子 (1993): 新聞記事に見る戦後の阿波踊り－演舞場の成立を中心に－, 徳島大学総合科学部健康科学紀要, 5, 21-31
- 5) 三好昭一郎 (1993): 阿波踊り縦横無尽, 阿波おどり No. 1, 阿波おどり研究会, 徳島, 22
- 6) 三好昭一郎 (1980): 徳島藩と阿波踊り, 阿波おどり, (徳島新聞社編), 初版, 徳島新聞社, 徳島, 235
- 7) 徳島新聞 (1952): 阿波踊り両あほう座談会下, 徳島新聞 1952. 9. 16, 徳島新聞社, 徳島
- 8) 三隅治雄 (1992): 風流踊りと盆踊り, 日本民俗学講座 4 芸能伝承 (和歌森太郎編), 4 版, 朝倉書店, 東京, 139-140
- 9) 前田正一 (1952): 阿波踊りの起源 (下) 月を仰いで猪追い, 徳島新聞 1952, 8, 13, 徳島新聞社, 徳島
- 10) 三隅治雄 (1992): 風流踊りと盆踊り, 日本民俗学講座 4 芸能伝承 (和歌森太郎編), 4 版, 朝倉書店, 東京, 140-141
- 11) 檜 瑛司 (1987): 踊り方教室, 阿波踊り写真集踊らなそんそん, 徳島新聞社, 徳島, 214
- 12) 小寺融吉 (1974): とくしまぼんおどり－徳島盆踊, 郷土民謡舞踊辞典, 名著刊行会, 東京, 327
- 13) 松本 進 (1980): 阿波踊りの手引き, 阿波踊り, 初版, 徳島市観光協会, 徳島, 50-52
- 14) 国末憲人, その他, 朝日新聞社徳島支局 (1992): 阿波おどりの基本ステップ, 阿波おどりの世界, 一版, 朝日新聞社, 東京, 220
- 15) 中村久子 (1992): 阿波踊りにおける多様性について－その2－, 徳島大学総合科学部健康科学紀要, 4, 7-8
- 16) 三隅治雄 (1992): 風流踊りと盆踊り, 日本民俗学講座 4 芸能伝承 (和歌森太郎編), 4 版, 朝倉書店, 東京, 139-140

